

# 都市型養豚として環境や地域貢献に注力 3人の後継者と共に更なる規模拡大目指す

有限会社 横山養豚（養豚経営・神奈川県横浜市）

## 地域の概要

（有）横山養豚のある横浜市は、人口約373万人で、県内の東部に位置し、東海道五十三次の神奈川宿に由来する。

横浜市の農業は、都市への新鮮な食材の供給者として、また緑地保全の基地としての役割もあり、横浜市がきめ細かい行政施策による支援を行っており、都市化の中にありながら第一次産業である農業が都市近郊農業として確立し、盛んに行なわれている。横浜市内の農地面積は3419ha、総農家数3415戸（2015年農林業センサス）と神奈川県最大である。

横浜市独自の農業振興策として、農業振興地域や生産緑地などの他に、農業専用地区という都市農業の確立と都市環境を守ることを目的とした地域が定められている。現在26地区、1011haが指定されており、横浜農業の中心として意欲的な農業経営が持続されている。

横浜市の畜産は、横浜港の発展とともに外人居留区が形成され、ここへの畜産物の生産を担う形で発達した。都市化の進展とともに、養豚農業は、市内の食品残さを飼料資源とし、肉豚経営の規模が拡大した。現在、都市化の進展が著しい横浜市内において、6戸の養豚農家が養豚経営を行っており、後継者も育てている。

また、横浜市内の食品副産物や学校給食残



右から代表取締役の清さん、長男の正至さん、長女の利佳さん、次男の拓生さん

さを飼料原料として活用しブランド豚肉「はまぼーく」を立ち上げ、市内の飲食店に豚肉を供給し、地域内で食品資源の循環に取り組んでいる。

さらに、地域の小学生などを養豚場に招き体験教室や小学校への出前事業を通して食育を推進するなど地域との調和を積極的に図っている。

## 経営・技術の特色等

### 【健康な高品質の肉豚を生産】

（有）横山養豚は、肉質の向上を目的に種豚の導入選抜を積極的に行い、肉質改善に取り組み、横浜市場で高い評価を受けるテーブルミートを追求している。改良の効果が出て、生産される豚肉の評価がたいへん高まっている。

一貫経営の基盤強化を図るため豚舎を増築し、現在、神奈川県内に5000頭規模の肥育施

(表1) 経営・活動の推移

年次	飼養頭(羽)数	経営・活動の内容
昭和39		有限会社横山養豚設立
平成16		有限会社横山養豚代表取締役就任
昭和40	母豚10頭導入	肥育専門から一貫経営に切り替え
昭和48	母豚100頭に増頭	経営の基礎固め
昭和60	母豚100頭を200頭に増頭	経営規模拡大
平成元		コンポスト導入
平成6		子豚離乳舎新築
平成8		ウインドレス離乳子豚舎、育成子豚舎新築
平成10		豚舎内臭気対策としてオゾン発生装置導入
平成10		細霧装置導入
平成11		食品循環型飼料(横浜市学校給食残さ)のテスト農場として試験開始
平成12		尿の公共下水道放流開始
平成14		食品循環型飼料(横浜市学校給食残さ)の本格的利用開始
平成21	母豚500頭	繁殖施設として千葉県成田農場新設
平成28		株式会社よこやま牧場設立

設を、千葉県成田市に母豚500頭規模の繁殖施設を保有し、2サイトで一貫生産体制を展開している。

規模拡大とともに繁殖、肥育の農場を分けたことにより、疾病の減少、事故率の低下が図られ、健康で飼料要求率に優れた肉豚の出荷を実現している。

繁殖農場の成田農場では、繁殖豚は雌も雄も自家産で人工授精を主とし自然交配は5%程度に過ぎない。母豚舎、分娩舎はすべてウインドレス豚舎で、空調や照明は自動管理され常に最適な温度に保たれ豚にとって快適な環境になっている。特に、分娩舎は床暖房が入っており、子豚が冷えて下痢を起こすことはない。子豚は週約24腹ずつ生まれ、23~25日齢ですべて離乳し離乳した当日に横浜まで移送している。移送に費やす時間は1時間40分ほどで子豚への影響はない。むしろ離乳後すぐに移送することにより子豚にストレスを与える前に移動でき事故が起きることは少ない。移送には最新の注意を払っており、50頭ずつ5つに分け、計250頭積むのに30分かからないほどの速さでトラックに積み込んでいく。移送中の温度管理は、冬場はシートで囲って保温するほか離乳舎を到着までに十分温め

(表2) 経営実績(平成28年)

経営の概要	労働力員数(畜産・2000hr換算)	家族構成員	3.2人		
		従業員	5.4人		
	種雌豚平均飼養頭数		500.0頭		
	肥育豚平均飼養頭数		5,000頭		
	年間子豚出荷頭数		186頭		
収益性	年間肉豚出荷頭数		10,716頭		
	所得率(構成員)		40.8%		
生産性	種雌豚1頭当たり生産費用		523,414円		
	繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.30回	
		種雌豚1腹当たり分娩子豚頭数		11.3頭	
		種雌豚1腹当たり子豚離乳頭数		10.2頭	
	肥育	種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数		22.5頭	
		肥育豚事故率		6.0% <small>(離乳時からの事故率)</small>	
		肥育開始時	日齢		90日
			体重		30kg
		肉豚出荷時	日齢		185日
			体重		114kg
		平均肥育日数		95日	
		出荷肉豚1頭1日当たり増体重		0.884kg	
		トータル飼料要求率		2.9	
		肥育豚飼料要求率		2.8	
枝肉重量			77.0kg		
販売価格	肉豚1頭当たり平均価格		37,179円		
	枝肉1kg当たり平均価格		483円		

ておく。夏場は夜に移送するなど気温が高い時間を避け、メッシュのカーテンで風通しを良くしている。こうした工夫により、子豚は横浜に到着後すぐに水を飲み餌を食べるなど元気な姿を見せている。

#### 【徹底した環境対策】

(有)横山養豚は、都市の中での養豚経営のた



肥育豚舎内部



豚舎外部



子豚ハッチ



子豚豚舎内部

め、早期に家畜糞強制発酵機（コンポスト）を導入し、できあがった良質堆肥を周辺野菜農家へ供給し耕畜連携を図っている。また、臭気対策として豚舎内をオゾン殺菌している。一棟ごとにオゾン発生装置を設置し、朝1時間、夕1時間を除きほぼ一日中稼働させ、常時オゾンを発生させている。オゾンは空気よりも重いのでスノコに溜まり、豚が動くことで、溜まったオゾンが攪拌され効果を増している。オゾンはふんを殺菌し、糞の発酵をおさえ臭いが発生しない。また、豚舎内通路にもオゾンエアーを吹きつけており、天井裏のインレットからもオゾンエアーが入り、換気口の吹き出し口からも外へも流れる構造になっており、豚舎の外側に2mm程度の穴を開けエアーカーテンのように流している。月の電気代は1万円程度で、配管等は塩化ビニー

ルパイプを自家施工したためオゾン発生装置の初期導入を除けばコストはかかっている。導入からすでに約20年が経過しているが臭気対策としてすばらしい効果を発揮している。

### 【ソーティングシステム導入による省力化の実現】

5年ほど前に米国のメーカーからソーティングシステムを導入した。この最新鋭の装置は、肉豚の体重を自動で測定し、出荷体重に達した豚とそうでない豚を仕分けてくれる画期的なシステムである。豚舎内の肉豚400頭の体重測定は非常に労力を要するが、このシステムでは、豚が餌を食べる際に豚自らソーターに乗り、その時に出荷体重に達していると自動的に出荷エリアに誘導されるようになっている。出荷時の体重チェックがなくなり、肉豚の管理が非常に合理化され、かつ枝

肉重量が揃い出荷が安定するようになった。万全を期すため、目視で気になる豚は再度測定しなおすことはあるが、ソーティングシステムを導入してから出荷時に問題は起きていない。また、導入後、豚房の仕切りの無い開放的な広い豚舎にすることができ、豚へのストレスの軽減にも大変効果を発揮している。

## 地域に対する貢献

(有)横山養豚は、「養豚業は都市と共存でき、消費者に支持され、地域に貢献する産業として発展できる」との精神を持ち、食品資源の循環型生産や地産地消など社会的役割を果たしている。

(有)横山養豚は、横浜市内の飲食店等で発生する食品残さを飼料とし肉豚の生産拡大を図ってきたが、肉用素豚を外部から導入し、肉豚を生産するだけでは品質の安定と向上に限界があると考え、「日本人の舌に合うテーブルミート」をつくるため、自らが肉用素豚の生産と改良を手掛けてきた。その結果として、神奈川県肉豚共進会では常に上位に入賞し、平成2・24・28・29年には、最高位の農林水産大臣賞や神奈川県知事賞を受賞するなど、種豚改良技術、飼養管理技術は卓越したものがああり、県内養豚農家の技術向上に指導力を発揮している。

また、肉質向上のため、地域の生産者とともに横浜市内の食品副産物や学校給食残さを原料とする豚用飼料を開発し、ブランド豚肉「はまぼーく」の立ち上げの中心的役割を果たした。生産された「はまぼーく」は、横浜市内の飲食店に安定的に供給されており、地域内の食品資源の循環を成し遂げた。

環境保全面では、県内で初めてオゾン殺菌・脱臭装置を導入し、公共下水の利用などとあわせ周辺環境に配慮した飼養管理を行って

る。また、共同堆肥化処理施設を整備し、周辺野菜農家への堆肥の供給など「都市と共存する農業を実践」している。

このような取り組みを参考にしたいと全国各地から多くの養豚農家が(有)横山養豚を訪れ、また、平成16年、当時の亀井善之農林水産大臣の訪問を受けるなど全国レベルで模範となる経営を行っている。なお、平成17年には、中央畜産会が実施した全国優良畜産経営管理技術発表会で最も優秀な経営体に贈られる農林水産大臣賞を受賞している。

また、横浜市の知的障害者農業就労事業に協力し従業員を雇用するほか、食育の面でも地域の小学生などを養豚場に招き体験教室や小学校への出前授業を実施し食育の推進など地域との調和を積極的に図っている。

また、経営主の横山清さんは、長年にわたり、神奈川県養豚協会の理事長として指導力を発揮し、県内で都市化が進む中、消費拡大へのイベントの開催、消費者ニーズを豚肉生産に反映させる取組や飼料用米の利用実証など地道な活動をとおり、消費者の関心を引くなど「その功は県内養豚農家が生き残る道を開く」功績は非常に大きい。

## 将来への方向性

(有)横山養豚は、横浜、綾瀬、千葉県成田市の3農場を所有しており、横浜本場は長男、綾瀬農場は長女、成田農場は次男と3人の後継者が各農場の責任者として管理運営している。長女に対しても女性ということで軽視することなく同じように養豚経営に参加させている。このように経営の次世代への継承が順調に進められており、養豚経営の継続が図られている。将来、母豚1000頭規模への拡大を目指しており、家族と従業員全員で目標達成に向け日々努力している。